

大学生活に対する不安感が 教育学部生の教職志向性に与える影響

○平木里奈^{#1}・西村優希^{#1}・西本瑞穂^{#1}・石野陽子^{#2}

(^{#1} 島根大学教育学部学校教育課程 I 類・^{#2} 島根大学教育学部)

目 的

現代の学校教育において、子ども自体やそれを取り巻く環境の多様性をはじめとして、学校での問題や教員の働き方に関する話題が注目されている。それらが教員養成課程に在籍しつつも最終的に教員を目指さない学生に影響している節がある。教員養成課程に在学初期の大学生の教職志向性に対し、どのような要因が影響しうるのか。

そこで、本研究では、教員養成課程の学生が抱える大学生活に対する不安感に着目し、それが教職志向性にどのように影響を与えているのかについて調査を行い、大学として何ができるかについて考察を行った。

方 法

調査対象者 国立大学教員養成課程に在学する大学 1 回生 115 名（男性 47 名、女性 68 名）**調査方法** 質問紙法。心理学系必修科目授業時において配布回収を行なった。配布部数 115 部、回収部数 115 部（100.00%）、有効調査部数 104 部（90.43%）であった。**調査時期** 2022 年 7 月 8 日（金）2 限終盤に 20 分程度で実施した。**調査内容** ①教職志向性尺度（島根大学教育学部が独自に設定）：4 項目、非常にあてはまる－あてはまらないの 6 件法、②大学生活不安尺度 3 因子（藤井，1998）：15 項目、あてはまる－あてはまらないの 3 件法。

結 果 と 考 察

教職志向性質問項目平均を基準として調査対象者を低群、中群、高群に分け、大学生活不安とその三つの下位因子である日常生活不安、評価不安、大学不適應のそれぞれについて t 検定を行なった（TABLE 1）。 t 検定の結果、大学生活不安において低群中群間 ($p > .05$) と低群高群間 ($p > .05$) には有意差が見られなかったものの、中群高群間 ($p < .01$) に強い有意差が見られた。この結果から、低群中群に比べて高群が大学生活不安を抱えていることが言える。また、大学生活不安の因子ごとの結果を見ると、日常生活不安において低群中群間 ($p > .05$)、低群高群間 ($p > .05$) に有意差は見

られなかったものの、中群高群間 ($p < .05$) に有意差が見られた。また、評価不安においても同様で、中群高群間 ($p < .01$) にのみ有意差が見られた。大学不適應においては、どの群間においても有意差は見られなかった ($p > .05$)。また、大学不適應における各群の因子得点の平均値が他の因子に比べ低かったため、日常生活不安と評価不安が大学生活不安を大きく占めていると言える。また、教職志向性が中群の学生の、大学生活不安における因子得点の平均値が最も高かった。これと t 検定の結果から、中群の学生が今後、抱えている不安に押しつぶされてしまうと、教職志向性が低くなる可能性として考えられる。

以上の結果から、教職志向性の低下を防ぐためには、大学生活不安のうち特に日常生活不安と評価不安を軽減するための大学の支援が必要であることが考えられる。具体的には、日常生活不安の質問項目として、卒業に関する不安や人間関係における不安が含まれていた。よって、指導教員による面談を定期的に行なうことや、同じ学科内の人と交流し、関係づくりを行なう機会を設けるなどの支援が考えられる。また、評価不安を軽減するためには、テストのみで評価するのではなく、課題や授業態度によって評価を行なうことや、それを学生にルーブリックとして提示し、評価の基準を明示することなどが考えられる。このように、大学が学生の大学生活に介入しつつ、学生が大学生活における不安を抱えすぎないようにすることが、教員養成課程の学生の教職志向性の維持に効果的なのではないかと考えられる。

TABLE 1 教職志向性質問項目平均を基準として大学生活不安の因子得点を低群・中群・高群に分けた群間での t 検定

	教職志向性 ($M = 4.63, SD = .71$)			t 検定		
	平均値					
	低群	中群	高群	低-高	中-高	低-中
大学生活不安	1.71	1.87	1.52	.19	.00 **	.11
日常生活不安	1.93	2.07	1.68	.20	.01 *	.29
評価不安	2.03	2.26	1.77	.24	.00 **	.09
大学不適應	1.20	1.26	1.11	.46	.15	.49

** : $p < .01$ * : $p < .05$